

ID No.	345
研究課題名	HIV-1 の潜伏感染とその長期生体内維持に関わる分子機構の解析
研究代表者	横田 恭子 (東京工科大学・教授)
研究組織	
受入教員	立川 愛 (東京大学医科学研究所・准教授)
研究分担者	寺原 和孝 (国立感染症研究所・主任研究官)
	小林 美栄 (国立感染症研究所・研究員)
	池野 翔太 (国立感染症研究所・大学院生)
研究報告書	
	<p>HIV-1の潜伏化は完治をめざす上で重要な障害となるが、感染者の潜伏化HIV-1の再活性化は一部の細胞にしか誘導できないことが知られている。我々はhomeostatic proliferationにより維持されるnaïve CD4陽性T細胞の潜伏感染とその意義を明らかにするため、GFPを発現するHIV-1に潜伏させた初期培養naïve CD4陽性T細胞において長期静止状態にある細胞をソートし、provirusの頻度、GFPやtatの発現を解析した。更に、ソートした細胞を培養し、再刺激として固相化抗CD3抗体と抗CD28抗体にIL-2を添加した条件(T細胞受容体刺激)あるいは脱アセチル化阻害剤SAHA、メチル化阻害剤deazacytidineを用いて刺激を加えたが、GFPの発現に大きな変化はなかった。一方、同じドナーの細胞をT細胞受容体刺激してから長期に維持してウイルスが潜伏化した細胞ではSAHAによる再活性化が誘導されたことから、naiveCD4陽性T細胞への感染でゲノムに挿入されたprovirusは少なくとも既存の方法ではHIV-1の再活性化がおきない状態で制御されていることが示唆された。</p>